
とあるオリキャラ達の学園生活

ガスキン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とあるオリキャラ達の学園生活

【Nコード】

N8164R

【作者名】

ガスキン

【あらすじ】

旅人の歩む道に出て来るオリキャラ達の学園コメディです。思いつきと勢いで書いたので正直滅茶苦茶ですが、皆様の暇潰しにでもなれば幸いです。

（前書き）

初の短編という事で、ちょっと頑張ってみました。

俺の名前は秋月 一成。某県立高校に通うこれと言って特徴の無い
高校二年生だ。

—「ZZZ・・・」

そんな俺は今、布団に包まって惰眠を貪っていた。学校へ行く時間
が迫っているが、この心地よさには抗えない。

?「一兄・・・一兄! 起きてよ、一兄!」

—「ん・・・」

ユサユサと揺らされる体。ゆっくりと目を開けると、妹の光^{ひかる}が俺の
体を揺すっていた。

光「おはよう一兄! 早く起きないと学校に遅刻しちゃうよ?」

—「それでも構わん。俺は寝るぞ光」

光「・・・また刹那先生が家庭訪問に来てもいいの?」

—「よし! 今日も一日頑張るぞ!」

光「うん。じゃあ、私は先にリビングに行ってるね」

そう言つて光は部屋を出ていった。俺は制服に着替え、先に洗面台に向かった。

？「おはようございますー成様」

歯磨きと洗顔を済ませ、リビングに向かうと、メイド服を纏った女性朝食を並べながら俺にあいさつしてくれた。

ー「おはよう天音さん」

この人は天音さん。^{あまね}この家の家事全般を担ってくれているありがたい人だ。正直、この人がいなかったら三日で家は滅茶苦茶になるだろう。

今現在、家には俺と光、そして天音さんの三人しかいない。両親は子どもを差し置いて世界旅行の真っ最中だ。元々奔放な性格の親だったので、俺も光も特に気にしていないが。

天「今日は和食にしてみました。お口に合うとよろしいのですが・・・」

—「そんな心配しなくてもいいですよ。天音さんの手料理は何だって美味しいですから」

天「あ、ありがとうございます／＼」

光「わ、私だって頑張れば出来るもん！」

—「そういうセリフは、玉子焼きをちゃんと焼けるようになってから言おうな」

光「う．．．」

天「ふふ．．．」

朝食を食べ終わり、俺と光は鞆を持って玄関に向かった。

天「お二人とも、今日はお帰りはいつごろになりますか？」

—「俺はいつも通りだと思います」

光「私も」

天「そうですか、では、それに合わせてお風呂と夕食の準備をしておきますね」

—「いつもすみません」

天「これが私のお仕事ですから。では、行つてらっしゃいませ」

光「行つてきまゝす！」

ガチャ！

—「ん？」

玄関を開けると、ほぼ同じタイミングで隣の家 of 玄関も開いた。

光「おはよう龍那お姉ちゃん！ 雲母お姉ちゃん！」

？「あ、おはよう光ちゃん、一成さん」

？「なんだ、お前らも今から登校か？」

仙道 龍那りゅうなと仙道 雲母きも・・・小学校の時からの幼馴染の双子の姉妹だ。瓜二つな二人だが、男口調なのが龍那。大人しい方が雲母である。

—「ああ、どうせなら一緒に行かないか？」

龍「いいぜ」

雲「は、はい」

四人で通学路を歩く。最早お決まりの光景だ。

龍「一成、英語の宿題やったか？」

一「当然だろ」

龍「頼む！ 後で見せてくれ！」

一「またか・・・ちゃんと自分でやらないと意味ないぞ」

龍「今回で終わりにすつから！」

一「前も同じ事言ってた気がするが・・・まあ、別にいいよ」

龍「サンキュ！ お礼にジュース奢ってやるよ」

雲「ごめんなさい一成さん。いつもいつも・・・」

一「ん？ いや、気にしないでくれ。ちゃんと役得もあるしな」

龍「そうそう！ 気にすんなって！」

一「キミは気にしてくれ・・・」

光「あはは！」

くだらない事をしゃべりながら角を曲がる。事件はそこで起こった。
・

雲「きゃう!？」

ピタン!

雲母の姿が消えたと思った瞬間、彼女は思いつきりすっ転んでいた。

光「だ、大丈夫、雲母お姉ちゃん!？」

龍「何やってんだよお前・・・」

雲「うう・・・何か踏んだと思ったら、急に足が滑って・・・」

—「何かっていうと・・・あれか」

俺の視線の先には・・・バナナの皮。

龍「・・・今時、あんなベタなものに引っ掛かるか？」

光「と、というか、こんな所にバナナの皮なんて普通捨てないよね・
」

—「立てるか雲母？」

雲「だ、大丈夫・・・痛ッ！」

膝を抱える雲母。よく見ると、右ひざに擦り傷が出来ていた。

雲「わ、私の事は気にしないで先に行ってください。後から追いつきますから」

龍「アホか、お前みたいな危ないヤツを一人にしたら、どんな事になるかわからねえだろ」

—「よし、俺が背負おう、雲母、乗ってくれ」

雲「で、でも・・・」

—「いいから」

雲「・・・すみません」

おずおずと俺の背に乗る雲母。学校までまだ距離があるが、彼女は軽いし何とかなるだろう。

光「いいなあ雲母お姉ちゃん・・・一兄、私もおんぶ〜」

—「無茶言わないでくれ・・・」

龍「なら、オレがおんぶしてやるよ」

光「え・・・」

返事も聞かず、龍那は光を背負った。

龍「飛ばすぜ！　しっかり掴まってるよ！」

光「え？　り、龍那お姉ちゃ・・・きゃあああああああ！！！！」

龍「うおおおおおおお！！！！」

ダダダダダダ！！！！

砂煙を巻き上げつつ、龍那は全速力で消えていった。

—「・・・」

雲「・・・」

—「・・・俺達も行くのか」

雲「そ、そうですね」

俺はゆっくりと、ゆっくりと（大事なので二回言った）歩き始めた。

—「ん？ 雲母、もっともたれかかって来てくれていいんだぞ」

雲「だ、駄目です！ そんな事したら・・・」

—「そんな事したら？」

雲「と、とにかく駄目なんです～～～！」

—「？」

理由はわからないが・・・本人が言ってるならいいか。

雲「（そ、そんな事したら・・・胸が背中に当たっちゃもん／＼）

」

・・・

十数分後、無事に学校に到着した俺達は、すぐに教室に向かった。
ちなみに、俺と龍那、雲母は同じクラスだ。

？「おお、一成ではないか！」

？「朝から何をやっているんだお前は・・・」

—「あ、神奈先輩、ルキア先輩。おはようございます」

ル「ああ、おはよう」

神^{かな}「先輩とルキア先輩・・・よく気にかけてもらっている先輩達だ。ついでに言っと、神奈先輩はこの学校の生徒会長で、ルキア先輩は副会長だ。」

—「実は、こういう事がありました・・・」

神「・・・なるほど、やはりお主は優しいな一成。惚れ直・・・見直したぞ」

—「はは、ありがとうございます」

ル「引き止めて言うのもなんだが、そろそろホームルームが始まるぞ」

—「おっと、まずいな。それじゃあお二人とも、失礼しますね」

神「また生徒会室に遊びに来い。歓迎してやるからの」

ル「そうだな。私がコーヒーでも淹れてやろう」

「わかりました。では、今度時間がある時にでもお邪魔しますね」

軽い約束を交わし、教室へと急いだ。

？「オッス一成！今日はギリギリだったな」

「おはよう十種。ちょっとトラブルがあつてな」

十「トラブル？・・・ああ、また仙道妹関係か」

友人の十種とくさが首を傾げるが、俺におぶさっている雲母の姿を確認すると、納得の表情を浮かべた。

彼は仙道妹と言っているが、双子である以上、どっちが姉でどっちが妹かは決まっていない。だが、性格の部分で、龍那が姉だという認識がクラス全体に広がっている。

？「見てたぞ一成・・・お前、校門からここに来るまでずっと雲母ちゃんを背負ってたな！」

「厳密にはそれ以前からだが・・・」

？「つまり・・・教室に来るまでずっと、雲母ちゃんのたわわに実った二つの果実の感触を味わってたって事だなー！」

—「果実？」

雲「ち、違います！　ちゃんと背中に当たらないようにしてたんですから！」

—「当たらない？」

雲「・・・はっ！」

？「雲母ちゃん、俺にも味わわせてくれ〜〜！」

？「変態もここまで来ると大したもんだね・・・」

ガシッ！

？「は、離せ弥生！」

？「雲母ちゃんはこのクラスのアイドルなんだよ？　キミの薄汚れた手で触れていい娘じゃないって事、いいかげん理解しなよ」

メキメキ！

？「食いこんでる！　指が腕に食い込んでるって！！」

絶叫しているのは知治^{ともはる}。そして、知治の腕を掴んで微笑んでいるの

は弥生^{やよい}。こうして、知治が何かするたびに弥生が痛めつける光景は、このクラスにとってお馴染のものだった。

男子「いいぞ弥生！ その馬鹿やつちまえ！」

女子「雲母ちゃんを狙うなんて、最低ねアンタ！」

知「こ、このクラスに俺の味方はいないのか・・・」

弥「自業自得だよ」

メキメキ！

知「ぎゃああああああ！！ 鬱血して来たああああああ！！」

雲「か、一成さん、もう降ろしてくれていいです」

一「ん、わかった・・・」

優しく降ろすと、雲母はゆっくりと自分の席に着席した。

龍「よお二人とも、遅かったな」

一「キミが速過ぎなんだよ龍那・・・光は大丈夫だったのか？」

龍「ちょっと目を回してたけど、ちゃんと教室まで届けておいたぜ」

一「そ、そうか。ありがとう」

キンコンカーンコン！！

予鈴が大きく鳴り響く。しばらくして、一人の女性が教室に入ってきた。

？「全員席につけ、ホームルームを始めるぞ」

俺達の担任である刹那先生せつなが出席簿を持って教卓に立つ。自らを『刹つちゃん先生』と呼ばせるこの先生は、そのフレンドリーな性格から男子、女子共に大人気の人だ。けれど、正直俺はこの先生の事が少し苦手だった。

その理由は・・・

刹「・・・ん？ どうした秋月？ 朝からずいぶん疲れているようだな」

一「え、ええ、実は・・・」

刹「ああ、みなまで言うな。仕方ない、愛するお前の為に我がマツサージをしてやろう。保健室でみっちりしっぽりな・・・」

この露骨過ぎる愛情表現の所為だ。もちろん、こんな素敵な女性に好意を向けられるのはとても嬉しいが、ここまで来ると軽く怖い。

知「先生！俺も腕が鬱血して辛いです！介抱お願いします！」

刹「そうか・・・そのまま破裂させてしまえ」

知「ちよっ！扱い変わり過ぎ！！」

刹「さあ、行くぞ秋月・・・」

弥「先生～～、それ以上するとセクハラですよ～～」

刹「・・・チツ、貴様さえいなければ」

知「何で俺！？」

一「助かったよ弥生」

弥「どういたしまして」

刹「連絡する事は特に無い。お前達・・・今日もしっかり青春を楽しめよ？」

親指を立て、にっこり微笑む刹那先生。男子は狂喜乱舞し、数人の女子が顔を真っ赤にさせて気絶した。

「（はは・・・今日も騒がしくなりそうだな）」

こうして、俺の一日はスタートを切った・・・

二時間目・・・国語

雲「そ、そして・・・太郎は今日子を・・・優しく・・・お、押し倒して・・・／＼」

刹「どうした仙道？ 早く続きを読め」

雲「よ、読めませんよぉ・・・」

刹「むっ、我が準備した教材が読めないというのか」

十「先生、これはただの官能小説です」

知「はあはあ・・・恥じらう雲母ちゃん萌え！」

龍「・・・弥生」

弥「任せて」

知「ま、待て！ 鼻鉛筆はシャレになら・・・！」

四時間目・・・体育

知「はっはあ！ 一成！ 俺の魔球はお前にも打てないだろう！
山籠りした成果を・・・今見せてやる！！」

光「一兄！ 頑張れ～～～！」

先生「秋月さん 授業に集中してください」

刹「秋月！ ホームランを打ったら我がキスしてやるぞ！」

体育教師「せ、刹那先生！ 何であなたがグラウンドにいるんですか！ 早く授業に戻って下さい！」

男子「秋月！ かつ飛ばせ～～！」

女子「絶対打てるよ秋月君！」

十「一成が打つのに食堂の食券十枚」

弥「駄目だよ十種。結末がわかりきってる事は賭けにならない」

龍「根性見せろよ一成！」

雲「が、頑張ってください・・・！」

知「ふん、いいさいいさ。数秒後、お前ら全員おつたまげる事になるんだからな・・・食らえ！『中途半端に消える魔球』！！！」

—「ッ！」

カッキイイイイイイイン！！

雲「え・・・」

龍「あゝあ・・・」

弥「うわあ・・・アレは痛いなあ」

十「ああ、ダイレクトだしな」

知「・・・タ、タマ・・・モロ・・・」

ドサ！

—「と、知治！」

男子「今回はかりは同情してやるぞ知治・・・」

昼休み

光「一兄！一緒に昼食べよう！」

一「ああ・・・ん、キミは・・・」

？「こんにちは秋月先輩！」

光「セレンちゃんも誘っちゃったけど、いいよね一兄？」

一「もちろんだ」

セ「ありがとう先輩！」

？「雲母ちゃんっん！」

雲「あ、世界ちゃん。どうしたの？」

世「今日は料理部お休みだつて。さっき先輩に教えてもらったから雲母ちゃんに伝えに来たんだよ」

雲「そうなんだ・・・ありがとう世界ちゃん」

一「やあ世界」

世「あ、一成君！ 今日もカッコいいね！」

一「はは、相変わらずお世辞が上手だな」

世「お世辞じゃないよお」

知「くそ・・・何で一成ばかりモテるんだよ・・・」

弥「そりゃあ、ルックスも性格も頭の良さも運動神経もキミよりずつと上だもんね・・・いや、比べる事こそおこがましいかな」

知「言い過ぎだろお前！ というか、そついうお前だって女っ気ぜ口だろうが！」

弥「あれ、言ってなかったっけ？ 僕この前・・・」

女子「弥生くん！ お待たせ〜！」

知「や、弥生・・・あの可愛い子は一体・・・」

弥「僕の彼女」

知「なん・・・だと・・・」

弥「僕あの子と一緒に昼食べるから。じゃあね〜」

知「・・・・・・・・」

十「知治・・・」

知「と、十種！　こうなったら、俺の頼りはお前だけ・・・！」

十「後輩の子に体育館の裏に呼ばれててな、悪いが先に食つといてくれ」

知「神は死んだああああああ！！！！」

男子「うるせえぞ知治！」

知「・・・俺、泣いていいよね？」

五時間目・・・英語

先生「では、秋月君・・・『愛している』と英語で言うてみてくたさい」

一「I love you」

先生「もう一度」

一「I love you」

先生「もっと感情を込めて！」

一「I love you！」

女子達「・・・／／」

先生「グッド！！ 実にグッドです！」

—「せ、先生・・・鼻血が出てますけど大丈夫ですか？」

先生「問題ありません！ で、では次は『結婚してくれ』と英語で・・・！」

知「・・・完璧に目をつけられてるな」

弥「大変だね一成・・・先生男なのに」

十「二人とも、いざとなったら全力で止めるぞ」

知・弥「了解・・・」

そして、六時間目の生物が終了し、一日の締めของホームルームが始まった。

刹「今日のお務めはこれで終了だが・・・お前達、ちゃんと青春したか？」

全員「サー！ イエッサー！！」

刹「よろしい。だが、まだ放課後が残っている。部活に勤しむなり、帰宅するなり、生徒からの告白を待ち続けるなり、しっかり励めよ」

十「最後のは先生だけだと思いますが・・・」

知「じゃあ、俺、あとで告白に行きます!」

刹「では、解散」

知「スルー・・・だと」

一斉に席を立つクラスメイト達。さて、俺はどうするかな・・・

一「(光、龍那、十種は部活。雲母は世界と買い物。弥生は彼女とカラオケだし。知治は・・・あ、生活指導の先生に連れて行かれた・・・)」

このまま帰宅するものなんだし・・・何かないだろうか。

一「(・・・そういえば朝、神奈先輩とルキア先輩にお呼ばれされてたな。時間が出来たし、行ってみるか)」

そう決めた俺は、鞆を持って生徒会室に向かった・・・

コンコン

—「すみません、二年の秋月ですけど・・・」

神「一成か？ 入るがいい」

—「失礼します」

扉を開けると、神奈先輩とルキア先輩が書類に向かっていた。

—「あ、すみません。お邪魔でしたか？」

ル「いや、もうすぐ終わるからな。座って待っててくれ」

—「わかりました」

椅子に座り、生徒会室の中を見渡す。すると、壁の方に見慣れないぬいぐるみを見つけた。

—「なんだあれ・・・」

神「先日、校長にオセロ勝負を挑まれたの。その戦利品じゃ。確か・・・ラッシーとかいう名前じゃったか？」

ル「なんでも、隣町の遊園地のマスコットキャラらしいぞ」

—「・・・」

これがマスコット？ 子ども泣くだろっ・・・

？「王様~~~~！」

—「ッ!？」

神「どうしたのじゃ一成？」

—「二人とも、何か言いましたか？」

神・ル「いや、特に・・・」

—「そ、そうですか・・・（気のせいかな）」

神「・・・よし、これで終わりじゃ！」

ル「こっちも終わりだ」

背伸びをする神奈先輩。その豊満な胸の所為で、制服のボタンが弾け飛びそうになっている。

—「お疲れ様です先輩」

神「ルキア、コーヒーを淹れてくれ」

ル「わかった。一成、お前にも淹れてやろう。砂糖はいくつだ？」

—「あ、俺はブラックでいいですよ」

ル「ほお、通だな。神奈のヤツは未だに砂糖とミルクを入れなければ飲めないというのに」

神「よ、余計な事を言うでないルキア！」

ル「ふっ・・・」

クールに笑い、ルキア先輩はコーヒーを淹れる準備を始めた。

神「な、何じゃその目は！ どうせ、お主も子どもっぽいか思っておるのじゃろう！」

—「まだ何も言っていないじゃないですか・・・それに、俺は別にそんな事思っていないですよ」

神「ほ、本当か？」

—「俺もたまに砂糖入れますしね」

ル「待たせたな」

俺の目の前に、黒い液体がなみなみと入っているカップが置かれた。

神「聞いたかルキア！ 一成も砂糖を入れておるそうじゃぞ。これでもお主は妾の事を子ども扱いするか？」

ル「たまに・・・だろう？」

神「ぐっ・・・」

一「ま、まあ、冷めない内に飲みましようよ」

コーヒーを飲みながら、先輩達と雑談を交わす。

一「そういえば、他の役員達はどうしたんですか？」

ル「私達だけで終わらせられそうだったからな、今日は帰ってもらった」

確かに、歴代史上最高の会長と副会長と噂されている二人だ。正直、本気でやれば他の役員は必要ないと思っっているのは俺だけではないと思う。

神「しかし、約束したとはいえ、交わしたその日に来るとは思っ
てなかったぞ一成」

一「迷惑でしたか？」

神「ば、馬鹿者。誰もそのような事言っではおらぬ」

ル「そうだな、ずっとソワソワしていたものな。・・・正直、期待していたのだろう神奈？」

神「そ、そう言うお主とて、ヒマさえあれば鏡の前で身だしなみを整えておったじゃろうが！」

ル「ッ！？ 何故それを・・・！」

神「ふん、妾が知らぬと思ったか！」

ル「・・・／＼」

—「あの・・・何の話ですか？」

神・ル「なんでもない！！！」

—「？」

その後、追い出されるように生徒会室を後にした俺は、とりあえず帰宅する事にした。

—「ただいま」

天「お帰りなさいませ一成様」

リビングでテレビを見ながらくつろいでいると、光が帰って来た。

光「ただいま〜〜!」

―「光、部活は?」

光「早めに切り上げちゃった。せつかくだし、セレンちゃんと遊ぼうと思って」

セ「お邪魔しま〜す」

―「ああ、いらっしゃい」

光「お部屋に行こうセレンちゃん」

セ「うん」

天「では、後でお茶とお菓子をお持ちしますね」

光「お願いね天音さん」

セ「ありがとうございます」

そう言つて、二人は二階へ上がって行つた。

天「一成様、今の内にお風呂に入られてはいかがですか?」

―「そうだな・・・そうしょうか」

天「お着替えをお持ちしますので、お先にお風呂場へどうぞ」

—「何から何まですみません」

天「いえいえ」

言われた通り、先に風呂場へ向かった。服を脱ぎ、体を流して浴槽に浸かる。

—「ふう・・・」

天「一成様、お湯加減はいかがですか？」

—「丁度いいですよ」

扉の向こうからの問いに上機嫌に答える。すると・・・

天「それはよかったです。では・・・私も入らせて頂きますね」

—「え・・・」

扉越しに見える天音さんの影が動く。その動きは・・・間違いたく服を脱ぐ動きだった。

—「あ、天音さん！？ 何を・・・！？」

天「せっかくですし、お背中をお流ししようと思ひまして・・・」

—「なっ！？」

天「失礼いたします・・・」

そして、扉が開き、天音さんが入って来た。

—「そ、それは・・・」

天音さんが纏っている物を指す。

天「見ての通り・・・スクール水着です」

—「な、何故・・・」

天「以前、知治さんに一成様はこうだったのが好きだと言ひまして」

—「（知治エ・・・）」

この時、俺は出鱈目な事を吹きこんでくれた友人に対して、初めて

殺意というものを抱いた。

．．．．．

知「な、何だ．．．妙な寒気が．．．」

．．．．．

天「では、失礼いたしますね」

一「．．．．．お願いします」

天音さんの持つスポンジが、ゆっくりと俺の背中を擦る。初めての感触だった。

一「（自分以外の手で洗われるのって、何だかくすぐったいな）」

天「．．．はい。流しますね」

お湯をかけられ、背中が泡が全て流された。

一「あ、ありがとうございました」

天「では、次は前を・・・」

一「結構です!!」

全力で断り、何とか事なきを得た。天音さんは、どこか不満そうな表情を浮かべながら風呂場から出ていった。

一「・・・疲れた」

それからしばらく浸かり続けた後、俺は風呂からあがった。

一「あれ？ もう帰るのか？」

玄関の方で、光とセレンちゃんが別れのあいさつを交わしていた。

セ「はい。お邪魔しました先輩」

一「またいつでも来てくれていいからな」

セ「だったら、私毎日でも来ちゃいますよ？」

一「はは、キミみたいな可愛い子だったら大歓迎だよ」

セ「え・・・／／」

一「ん？　どうかしたか？」

セ「な、何でもないです！　それじゃあお休みなさい！！」

セレンちゃんは逃げるように帰って行った。

一「どうしたんだ一体・・・」

光「むう・・・」

一「光？」

光「一兄の馬鹿！　たらし！　フラグ立て男！！」

そう言ってズンズンとリビングに向かう光。

一「我が妹ながら・・・さっぱりわからん」

夕食を済ませ、あとは寝るだけになったが、相変わらず光は不機嫌なままだった。

コンコン

光「……誰？」

—「俺だ」

光「……」

—「入るぞ」

了承を得ずにドアを開ける。光はベッドにうつぶせになっていた。

光「何で勝手に入ってくるの」

—「なあ光、何で怒ってるんだ？」

光「ふーんだ。一兄には教えてあげないもんね」

—「俺が悪いんだったら謝るから、機嫌直してくれよ」

頭を下げる。すると、光はようやく顔を見せてくれた。

光「……お願い」

—「え？」

光「お願い・・・聞いてくれたら許してあげる」

一「わ、わかった。俺に出来る事なら何でもするよ」

光「だったら・・・」

・・・

一「・・・どうしてこうなった」

光「これでいっぱいおしゃべりできるね」

ベッドに横になる俺。そして、その隣では光が上機嫌に微笑んでいる。

光のお願い・・・それは、『一緒に寝る』事だった。

光「一兄い、暖かいね」

一「俺は少し熱いんだが・・・」

光「我慢しなさい」

一「・・・」

？「うう・・・羨ましいです」

ー「え？」

気配に向くと、天音さんがドアの隙間からこつちを見ていた。

光「天音さんも一緒に寝ようよ！」

ー「お、おい、それは・・・」

天「ぜひ一緒に過ごさせてください！」

・・・

ー「・・・どうしてこうなった」

光「ね、天音さん。一兄暖かいでしょ？」

天「はい、とっても・・・／＼」

光の部屋のベッドでは狭いという事で、俺の部屋に場所を移した。
右隣に光。左隣に天音さん。そして、中央に俺が寝る。

光「・・・すう」

—「光？」

天「．．．．くう」

—「天音さん．．．」

規則的な呼吸音．．．いつの間にか、二人とも寝ていた。

—「．．．．はは、おしゃべりするとか言ってたのに、もう寝てしまったのか？」

光「むにや．．．一兄．．．」

天「一成．．．様．．．」

—「お休み二人とも、いい夢を．．．」

こうして、俺の騒がしい一日は幕を閉じた。願わくは．．．掛け替えのない仲間達とずっとこうして過ごしていく事が出来たらいいな．．．

．．．．．

．．．．．

・
・
・

—「・・・という夢を見たんだが」

神「ふむ、中々面白い夢じゃな」

天「嬉しいです。夢の中でも、私は一成様にお仕え出来ていたので
すね」

刹「なんだ、我が君は女教師が好きなのか。それならそうと言って
くれればよいものを」

光「私、そんなにヤキモチ焼きじゃないもん！」

龍「幼馴染か・・・悪くねえな」

<わ、私だってそんなドジっ子じゃありませんよお！>

（後書き）

作「急に思いついたんで書いてみたぜ短編」

神「妾が先輩か・・・新鮮じゃったな」

刹「我も中々だったと思うが」

天「実際にいたら即刻逮捕でしょうけどね」

ゼ「私など、セリフすら無かったがね」

光「やっぱり男キャラが増えると楽しいね」

龍「知治の事か？ あいつ弄られ過ぎだろ」

雲「彼ってオリジナルキャラクターの募集の時に送って頂いたキャラクターだね？ こんな風に扱っていいのかな」

作「心配いらない。好き勝手してくれて構わないと許可を頂いているからな」

一「書いてしまえばこっちのものだ」

作「また思いついたら書いてみるか・・・その前に本編の方を終わらせにやならんが」

刹「この短編を見て面白いと思った方、ぜひとも本編も読んでみてくれ」

光「きつと楽しんでもらえると思うよ！」

ゼ「私もちゃんと活躍しているからな」

天「では、そろそろ失礼致しますね」

神「読んでくれて感謝するぞ」

—「それじゃあ・・・さようなら」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8164r/>

とあるオリキャラ達の学園生活

2011年10月7日00時12分発行